

大磯 暮らし

TAKE
FREE
VOL.
02
2018



特集

仲間と集う、大磯ライフ。

大磯町ってどんなまち？

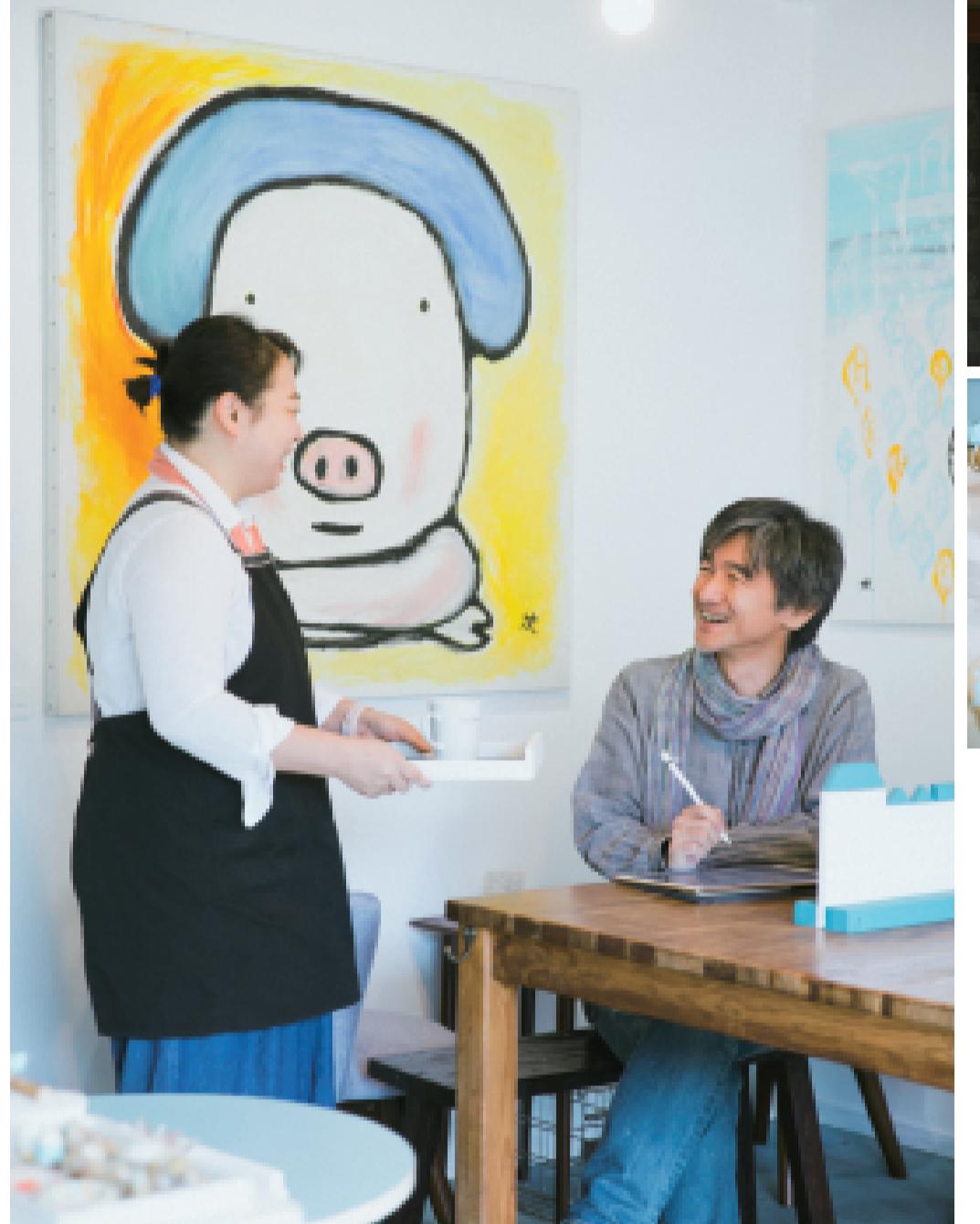
大磯町をつくる9つの価値観
大磯町を知ろう！



OISO

さあ、大磯で君の物語をはじめよう

大磯町新たな観光の核づくり推進協議会



(右上)『宿場まつり』に向け、着付けする様子。(右下)『At GALLERY N'CAFE』に並んでいた動物の小物。店内にはほかにもたかしまさんの作品が展示されている。店名のAは文さん、tはたかしまさんのこと。(左)店主は文さん。たかしまさんはコーヒーを飲みながら仕事をしたり、ビールを飲みに来る。「ちゃんと消費してあげないと、なんて言ってビールを飲みに来ますが、お代はちゃんといただきます(笑)」と文さん。

形でわかるようになつてきました。帰りには、クーラーボックスいっぱいお魚をくださるんですよ」魚はすぐに下処理が必要になる。大量にさばくうちに、今では、3枚おろしもできるようになつた。「人生って、おもしろいですね。僕はお湯を沸かすことも面倒くさがっていた人間なんです。ホットコーヒーを飲むなら、水を飲もう。それぐらいの人間でした。それに、大磯に来て、魚をおろせるようになつたのは、ものすごい進化だと思つています」

時に、ボランティアで団体をサポートしている。町内のイベント時には、必ずと言っていいほど、その姿を現す。

毎年11月に開催される、江戸の宿場町のにぎわいが再現される『大磯宿場まつり』では、にぎやかしの着物姿で、視察の方の案内をした。着付けは、代表の富山さんの家にメンバーや地域の人人が集まり、わいわいとおしゃべりしながら行われた。案内の後は、お酒をぐいっと飲んで楽しみつつ、会場の片付けの手伝いも忘れない。

そのほかに、大磯港で定置網の手伝いもしている。午前2時に集まり、漁師さんが獲った魚を大きさや種類で仕分け、箱に入れていく。週に一度、たかしまさんも参加しているが、まさか漁師さんを手伝う日がやって来るのは、思いもよらなかつた。

「魚は食べる時の姿しか、知らないぐらいの人間で、最初は自身が赤身かの違いぐらいしかわからなかつた。今は定番で獲れる魚なら、形でわかるようになつてきました。帰りには、クーラーボックスいっぱいお魚をくださるんですよ」

魚はすぐに下処理が必要になる。大量にさばくうちに、今では、3枚おろしもできるようにもなつた。「人生って、おもしろいですね。僕はお湯を沸かすことも面倒くさがっていた人間なんです。ホットコーヒーを飲むなら、水を飲もう。それぐらいの人間でした。それに、大磯に来て、魚をおろせるようになつたのは、ものすごい進化だと思つています」

特集 仲間と集う、大磯ライフ。

大磯には、「大磯の魅力をもつと伝えたい」、「大磯で暮らしをとことん楽しみたい」、そんな想いを持つて活動する団体がたくさんあります。「大磯が大好き」を合言葉に、世代を超えて一緒に活動する仲間がいる。それだけでちょっとびり幸せを感じませんか？　仲間と一緒に、暮らしを楽しむ4人にお話を伺いました。



たかしまてつを／画家・イラストレーター
1967年愛知県生まれ。山梨大学工学部卒。1999年『ボロニヤ国際絵本原画展』入選。2005年『二科展』デザインイラストレーション部門特選賞。『ピッグ・ファット・キャト』シリーズ（共著／幻冬舎）など多数。

大磯が大好き。町を愛する元気な

01

NPO法人 大磯だいすき倶楽部

かしまさんは、2年前、
京からやってきて以来、
磯のとりこです。
大磯最高、大磯大好き』が口癖です。
んなある日、会った
の名も『大磯だいすき倶楽部』。
歳、期待の“若手”として、
ちこちで町の応援をしています。

「大磯に引っ越したばかりの頃、大磯最高、大磯大好きと何度も口にしていたら、大磯に住む昔から友人に『大好き大好きって、言いすぎ！』と笑われました」

そう語るのは、つぶらな瞳が印象的なたかしまてつをさん。2年ほど前に、国道1号線沿いに建つ、理想的な古民家物件にひと目惚れ。妻の文さんと東京の小平市から移住を決めた。住みながら、自分で物件を改装し、念願だったギヤラリー＆カフェ『At GALLERY N CAFE』をオープン。開店してすぐ、お客様として来てくれたのが『大磯だいすき俱乐部』の南出要子さんだった。

今度、聖ステパン学園の海の見えるホールで『まちづくりフォーラム』があるから、見において

入っちゃえばいいじゃん！」初対面とは思えぬ、その勢いに圧倒され、行ってみることにした。さらに、『大磯だいすき俱乐部』という名前の団体にも驚かされた。「大磯が大好き、と言っていたら、大磯だいすき俱乐部があつた。その名前も魅力的でした（笑）」訪れてみると『大磯移住を支えるよそ者・若者・ばか者』をテーマにした、素敵なイベントだつた。終了後、みんなに挨拶をすると、本当に大磯が大好きなことが伝わってきて、その場で入会した。

そんな風に、どんどん地域にとけこんでいくたかしまさんによつぱり大磯が性に合つていたのかな？」と文さんは優しく語る。『大磯だいすき俱乐部』では、大磯市や湘南国際マラソン、大磯の

たかしまさんならではの活動も任されるようになつた。最近では、ご近所の写真館さんから、「パッケージのデザインの仕事を頼まれたり、大磯町の防災を自分たちで考える『大磯町災害救援ボランティア』にも所属したら、広報誌を任されたり、暮らしと仕事が結びつくようになつてきた。

「引っ越してすぐ、町内会に入りたくなつて、どうすれば入れますか?」と役場に電話したんですよ。そんなことは生まれて初めてです」

たかしまさんは、町内会、青年部、大磯町商工会などにも所属している。気づけば、町中に知り合ないだらけ。大磯に来たばかりの頃は、今、住んでいる下町の人の口調がきつく、怒られているようを感じた。けれど、慣れてくると、そんなことは全然なく、むしろ、声をたくさんかけてもらい、気を遣つてもらつてることにも気がついた。わからないことを聞くと親切に教えてもらえる。

「暮らす、ということを見つめるど、人との関わりだと思うんですね。大磯はずっと暮らしていきたい、という意識が強いので、地域でいろいろな人と関わり、あらゆることを教わりたいと思つています」

地域の先輩から声がかかると、嫌な顔ひとつせず、「やりたいです!」と進んで手伝う。

「僕は50歳。世間では年配と言われる立場ですよね。でも、大磯では、ひよっこ扱いしてもらえる。僕よりも、ずっと年上で元気な人達がいる。その姿を見ていると、自分の未来がものすごく明るいものに思えてくるんです」

今ではだいすき俱楽部の理事も任され、中心メンバーとして、日々活動する。大好きな大磯でずっと暮らしていく。ほんわかとした人柄の内側に強い意志を感じられた。

 NPO法人 大磯だいすき倶楽部

2002年に開催された、大磯町のまちづくり総合計画のワークショップをきっかけに集まった30代～70代のメンバーで結成。大磯町でお祭りやイベント時に、後ろ盾になるような立場で活動している。地元出身者や移住者など、接点がない人と人をつなげることも大きな目的のひとつ。毎月第3日曜に開催される『大磯市』では、大磯漁協の漁師が獲った魚を出汁にした磯汁や大磯産のお米を使ったおにぎりなどを販売している。

<https://www.oiso-odc.com>



(上) 大磯だいすき倶楽部のメンバーが集い、聖ステパノ学園の海の見えるホールにて。(右)『まちづくりフォーラム』の様子。2017年にはバネリストとして、壇上に上がり、話をする側になった。(中)高齢化と資金難により継続が厳しくなりつつある『大磯の左義長』を支援するため、御守木札を作成して販売。(左)一度見たら忘れない笑顔が印象的な、代表の富山昇さん。

町内を巡回する警察官から、町を案内するガイドへ。

旧吉田茂邸の敷地内の庭には、大きな釜がある。佐藤安満さんが案内する足を止め、「これはね、石川五右衛門が釜茹での刑にあった金ですよ」と大真面目な顔でいう。

お客さんが「えっ」と驚くと、「うそ、うそ」と言つて、尻を下げる笑顔を見せる。安満さんはそんな風にお客さんを楽しませ、20年近くガイドをしている。

「警察官だった頃はね、大磯町内を巡回していたんだけど、全然、大磯の町の歴史を知らなかつた。駐在所で町のことを聞かれても、まともに答えられない。ちゃんと知りたい。それがきっかけですよ」

駐在所に勤務していた頃、お宅1軒1軒を回り、身元を調査する戸籍調べがあった。随筆家の白州正子の兄が住んでいた樺山邸をはじめ、財閥人、政界人、芸術家など著名人のお屋敷も訪れた。「女中さん、次に奥さんが出てきて、いらっしゃいが、ます、と言ふんです(笑)。佐藤さん、今日は夕食会があるから来ない? なんて誘われて。分譲されて、なくなったお屋敷が多いけど、思い出話を伝えられるから、今、私なりのガイドをやってるんですよ」

協会では月に一度集まり、みんなで案内の仕方や情報を交換する。「責任を持つて活動すると、尊敬の念が生まれる。仲間同士で声をかけ合い、労をねぎらう。それが親密さにつながっていくと思うよ」

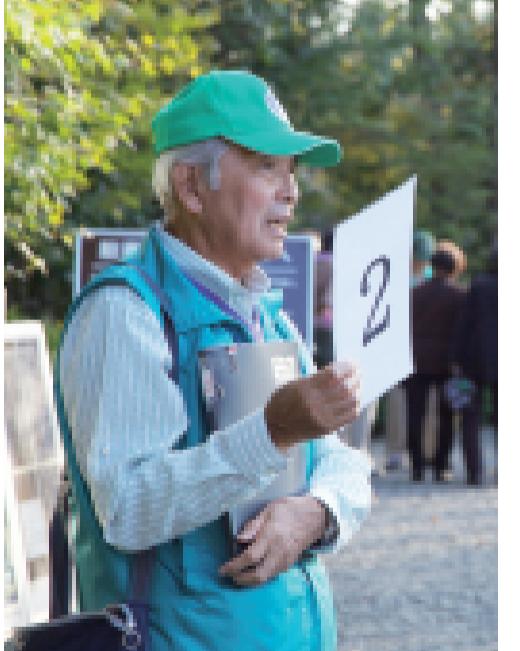
安満さんは、新しい人が入ってきた時や、大変そうな仲間には「何か困ったことある?」とさりげなく声かける。77歳になつても、元警察官らしく、みんなを守る! そんな想いが伝わってきた。

02 佐藤安満さん

NPO法人 大磯ガイド協会
anman sato



（上）大磯ガイド協会のみなさん。前列の右から2番目が会長の浅見和男さん。（右下）ガイド中の佐藤安満さん。旧吉田茂邸の案内では、吉田茂の門下生・田中角栄のモノマネを披露してくれる。（左下）高田公園から望む景色。裏山を登るコースなどで訪れる。



NPO法人 大磯ガイド協会

大磯の歴史や文化、自然の魅力について、町を歩いて伝える団体。定年退職した元サラリーマンや先生、主婦など、大磯町の住民を中心に、周辺の町に住む大磯が大好きな50名以上のメンバーが在籍している。ガイドになるためには何度も研修があり、大磯にまつわる100名以上の著名人を覚え、どんなコースでも案内できるようしている。大磯ゆかりの女性や文化人の跡地をめぐったり、裏山の散策など、ただの観光地めぐりにはならないように、大磯住民がいいな、と感じている暮らしの魅力を伝えている。

<https://www.oisoguide.com>

03 大好きなお酒や食でつながる農園仲間です！

大磯農園

吉田陽子さん
yoko yoshida

人生後半と一緒に過ごす仲間をつくりたい!
子育てがひと段落し、ご主人とともに東京から大磯へやってきた吉田陽子さん。
『大磯農園』でおしゃべりをしながら稻刈りをお楽しみ中に、おじゃました。



03 大磯農園

吉田陽子さん
yoko yoshida



(上) 大磯農園の仲間達。10月中旬、日本酒用の酒米・山田錦の稻刈りが行われた。(左下) おしゃべりしながら、稻刈りをしていた吉田陽子さん。大磯に引っ越したばかりの頃は、虫の鳴き声や空の青さに、「同じ時間を作っているのに、東京とは全然違う」と感激していました。



（左）大磯農園の仲間達。10月中旬、日本酒用の酒米・山田錦の稻刈りが行われた。(左下) おしゃべりしながら、稻刈りをしていた吉田陽子さん。大磯に引っ越したばかりの頃は、虫の鳴き声や空の青さに、「同じ時間を作っているのに、東京とは全然違う」と感激していました。

大磯農園

都会の人も地元の人も一緒に田舎暮らしを体験できる、会員制の農園。「何でもゼロから」「とことんあそぶ」を合言葉に、遊休農地だった田んぼで酒米を育て、収穫し、茅ヶ崎の熊澤酒造に納めて最高においしい日本酒をつくってもらい、お正月に箱根駅伝を見る時のおとも『大磯こたつみかん』を無農薬栽培。もらってきた大谷石で石窯やかまどを組み立てたり、津久井在来大豆と酒米の米麹で手前味噌をつくるなど、農的な暮らしを楽しみながら自給自足を目指す。

<http://oisofarm.com>

はじめませんか?
農園くらし

自分のやりたいことを
穏やかに楽しみながら
暮らせる町

「そんなに褒められる」と照れます
(笑)。日当たりの良い和室でそ
う笑うのは、「大磯うつわの日」
のパンフレットを手がけ、友太郎
さんから『神』と呼ばれた安藤紫
野さん。

関西出身。神戸、大阪、奈良と
暮らしてきた紫野さんが大磯の街
に移り住んだのは4年前のこと。
曰那さんの都合で西湘エリアに住
まいを探していたという紫野さん
一家。大磯に決めた理由は?
「海と山が好きなんです。以前は
奈良の盆地で暮らしてから、海
への渴望がすごく(笑)。神戸
にいたこともありますが、大磯
を初めて訪れた時、その街並みが
神戸の西の方の街並みに似ている
などと思いました」

先に大磯で暮らしあげた旦那
さんの後を追い、小さな愛娘の花
ちゃんと共に2014年10月、西
小磯のアパートから大磯暮らしが
始まった。今は昭和の建物である
いかな?なんて、いろんな人に
言ついたら、知り合いのそのまま
た知り合いの方から、この物件の
お話を回ってきて。大磯ってつな
がりやすいというか、そういう町
なんですね」

最初は縁のない土地で不安も
あつたが、気がつくとくさんの
友人達に囲まれて暮らす毎日に。
そのきっかけが『大磯うつわの
日』だった。

「私が越してきて、初めて
お客様として参加したイベント
がうつわの日だったんです。もと

もとうつわ好きだったこともあり、
街の中を歩いて、うつわを買える
イベントがあるんだって。こんな
におもしろいこと、大磯でやって
んだったって思いました」

翌々年、偶然『大磯うつわの日』
で『ちやわん隊』という名のボラ
ンティアを募集していることを知
り手を挙げた。

「子どもを通じて知り合いが増え
ていく中で、だんだん生活も落ち
着いてきて、なにかできることあ
るかな?と思つたときには、ちょ
うど募集を知つたんです。デザイ
ンの仕事をもつていてるので、新しい
つながりもできたりなどという
思いもあって。でも、街や人と深
くつながつたのは、昨年実行委員
会をきつかけに、うつわの作家
さんとの仕事を生まれました。うつ
わの日、おかけです。改めて、
参加してよかったです」

大磯暮らし4年目。今は想像以
上に暮らしが楽しいと紫野さん。
「こんなに地域で知り合いが増え
ると思っていなかつたですね。町
を歩けば、誰か知つている人に一
人は会いますから。これも『うつ
わの日』のおかけです。改めて、
参加してよかったです」

それに、大磯町で知り合う方々は、
美大時代の友人みたい(笑)。自
分のやりたいことを自分のベース
で、穏やかに楽しみながら暮ら
している方が多い気がしますね」

陽だまりの中で、花ちゃんを囲
んでの縁側タイム。大磯の素敵な
暮らしの物語がここに。



大磯うつわの日

大磯町の文化財や古民家、ギャラリーや飲食店で陶芸・木工・ガラスなどの“うつわ”をテーマにした展示販売を行なうイベント。2011年に大磯で暮らす陶芸家同士が声を掛け合って、自宅を開放して展示をはじめたのがきっかけ。作家さんと直接会って会話をしたり、うつわとの出合いを楽しんでただくだけでなく、大磯の町を隅々まで歩くきっかけも提供している。2017年は『おいしいうつわ』をテーマに、49ヶ所でうつわを展示、JAZZイベントも開催されるなど、広がりをみせている。

<https://oiso-utsuwa.jimdo.com>

毎年
宮ふらん
ちやわん隊も
募集中!



「そんなに褒められる」と照れます
(笑)。日当たりの良い和室でそ
う笑うのは、「大磯うつわの日」
のパンフレットを手がけ、友太郎
さんから『神』と呼ばれた安藤紫
野さん。

もとうつわ好きだったこともあり、
街の中を歩いて、うつわを買える
イベントがあるんだって。こんな
におもしろいこと、大磯でやって
んだったって思いました」

翌々年、偶然『大磯うつわの日』
で『ちやわん隊』という名のボラ
ンティアを募集していることを知
り手を挙げた。

「子どもを通じて知り合いが増え
ていく中で、だんだん生活も落ち
着いてきて、なにかできることあ
るかな?と思つたときには、ちょ
うど募集を知つたんです。デザイ
ンの仕事をもつていてので、新しい
つながりもできたりなどという
思いもあって。でも、街や人と深
くつながつたのは、昨年実行委員
会をきつかけに、うつわの作家
さんとの仕事を生まれました。うつ
わの日、おかけです。改めて、
参加してよかったです」

大磯暮らし4年目。今は想像以
上に暮らしが楽しいと紫野さん。

「こんなに地域で知り合いが増え
ると思っていなかつたですね。町
を歩けば、誰か知つている人に一
人は会いますから。これも『うつ
わの日』のおかけです。改めて、
参加してよかったです」

それに、大磯町で知り合う方々は、

美大時代の友人みたい(笑)。自
分のやりたいことを自分のベース
で、穏やかに楽しみながら暮ら
している方が多い気がしますね」

陽だまりの中で、花ちゃんを囲
んでの縁側タイム。大磯の素敵な
暮らしの物語がここに。



安藤紫野／デザイナー
1982年生まれ、神戸市出身。2005年京都市立芸術大学美術学部版画専攻（スクリーンプリント）卒業。高等学校的美術教諭を経て、グラフィックデザイナーとして働き、2014年独立。フリーランスに。大磯町移住を機に屋号を『こゆるぎデザイン』とする。

「僕にとって紫野さんは、神ですね(笑)」
と語るのは、昨年で7年目となる『大磯うつわの日』の実行委員長であり、陶芸家の岡村友太郎さん。毎年秋に3日間かけて大磯にいるギャラリー・やカフェに、うつわと地元の作家さん達が集い、町中を回遊しながら楽しむことができるイベントとして多くの方が訪れる。昨年から会場マップを盛り込んだパンフレットのデザインを大磯で移住して3年目だった安藤さんに依頼、制作を担当してもういました。「僕たちのこうしたい、ああしたいを、『こんなんどう?』って、ずっと出してくれる。手際が本当に良いんです。関西なまりもいんすすよね」

2011年に平塚で陶芸の工房と教室を開いていた岡村さんが大磯へ移住。その後3ヶ月後に、突然の呼びかけから始まつた『大磯うつわの日』。「近所の建築家さんが自宅で知り合いの作家さんを呼んで、個展をやるから一緒にやろうと声をかけられて」。自宅で個展など想像もしていなかった友太

郎さんだが、知り合いに声をかけられた5組の展示が立ち上がったそ。昨年は町内49ヶ所がうつわで彩られ、関連するイベントやワークショップも行われるイベントに成長した。開始当初は想像もしていなかつたというが、そこに「大磯に住む人達の融合」があつてこそと岡村さん。

「うつわの日は小さなところからスタートして、いろいろな方が思つたときに『大磯うつわの日』に行こう!」と言われるくらいのイベントになればいいですね。そ

川の方々がうつわを買いたいなど思つたときに『大磯うつわの日』に行こう!」

のゴールに向かって、毎年関わる人たちが少しづつ力を出し合つて、成長していくたら理想的ですね。

昨年も紫野さんを含め、たくさんの方々にサポートしていただき、結果、多くの方々に足を運んでいました。うつわをきっかけに、大磯の町を散策していただいて、町の魅力を知つてもらえたから、ただけました。

に大磯の魅力を散策していただいて、街だけでした。うつわをきっかけに、町の魅力を知つてもらえたから、ただけました。

町の魅力を散策していただいて、街だけでした。うつわをきっかけに、町の魅力を知つてもらえたから、ただけました。

町の魅力を散策していただいて、街だけでした。うつわをきっかけに、町の魅力を知つてもら

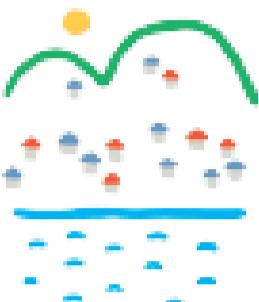
"えほん"つくりました!



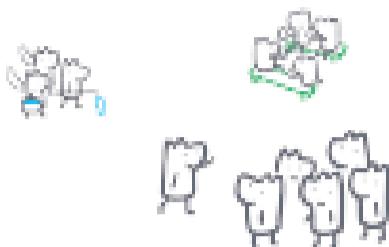
2018年3月発行

大磯町をつくる9つの価値観について、多世代のみなさんに知っていただきための"えほん"です。ぜひ、ご覧ください。

1. 自然との共生



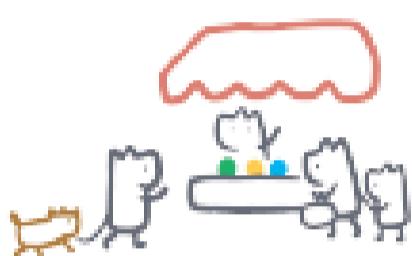
2. つながり



3. 文化の継承



4. 地元優先



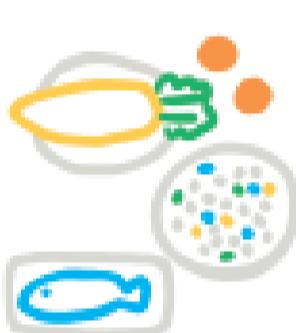
5. 独自性



6. 手づくり



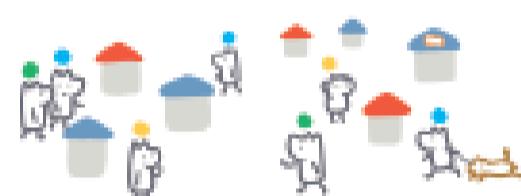
7. 地産地消



8. 歩いて楽しい



9. 創造



大磯町新たな観光の核づくり推進協議会

この協議会は、大磯町の観光関連 22 の団体や企業を中心となった組織です。大磯町における観光とは、町内で暮らす人々が感じる町の魅力を自ら発信して、その発信をきっかけに大磯町を訪れる人を増やしたり、訪れた方々がその魅力に触れることで、将来的に移り住みたいなと思っていただけるような、そんな町を目指して、日々活動に取り組んでいます。

協議会メンバー紹介

東日本旅客鉄道株式会社、大磯プリンスホテル、大磯飲食店組合、大磯逸品の会、(公財)神奈川県公園協会・湘南造園株式会社グループ、NPO法人大磯ガイド協会、NPO法人西湖をあそぶ会、大磯二宮漁業協同組合、湘南農業協同組合、株式会社ランナーズ・ウェルネス、学校法人東海大学、おおいそオープンガーデンホーム運営委員会、NPO法人大磯だいすき倶楽部、神奈川中央交通株式会社、大磯港みなとまちづくり協議会、星槎湘南大磯キャンパス、大磯町区長連絡協議会、神奈川県湘南地域県政総合センター、神奈川県平塚土木事務所、(公社)大磯町観光協会、大磯町商工会、大磯町
以上 順不同

『大磯暮らし』をご覧のみなさまへ

今年も『大磯暮らし』をみなさまにお届けできることを嬉しく思います。このフリーペーパーは、大磯で生活し、地域でさまざまな活動に関わっている方々を通じて、大磯らしい暮らしづくりを発信するために制作しております。紙面でご登場いただいたのは、『大磯町をつくる9つの価値観』と深い関わりをお持ちの方々です。ご覧になったみなさまが、改めて大磯町の魅力に気づいていただいたら、また、これをきっかけに大磯町に興味を持ち、訪れていただけたと幸いです。

◎『大磯暮らし』のVOL.01をご覧になりたい方は isotabi.com で検索ください。

大磯町を知ろう!

(平成30年3月1日現在)

人口



31,513 人

世帯数



12,564 世帯

面積



17.23 km²

アクセス



約 40分

横浜 → 大磯

約 55分

品川 → 大磯



<発行> 大磯町新たな観光の核づくり推進協議会

事務局: 大磯町 産業環境部 産業観光課

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯1398-18 TEL.0463-61-4100(内線334) Eメールアドレス:kankou@town.oiso.kanagawa.jp

●企画・編集・デザイン 森川正信 ●取材・文 上浦未来(P2~5)、たけいしちえ(P6~7) ●撮影 濱津和貴(表紙、P2~3)、八幡宏(P6~7)